

大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業
（イノベーション対話促進プログラム）
実施状況報告書

平成26年4月10日

国立大学法人名古屋大学

目次

1. 当初計画の概要等	2
(ア) 背景	2
(イ) 当初設定した事業の目的	3
(ウ) 実施体制	3
① 事業実施責任者	3
② 体制	3
③ 実施担当者	4
2. 当初計画の概要等	6
(ア) 事業全体の概要	6
① 目標	6
② 方法	6
3. ワークショップ実施状況	8
(ア) 概要	8
① 全体像	8
(イ) ワークショップ詳細	12
① 第1回学内ワークショップ	12
② 第2回学内ワークショップ	17
③ 第3回学内ワークショップ	21
④ 第1回広域ワークショップ	25
⑤ 第2回広域ワークショップ	31
⑥ 第1回国際ワークショップ	41
⑦ 第2回国際ワークショップ	48
⑧ オンラインワークショップ	52
⑨ サイエンス・カフェ	59
4. 事業実施により得られた知見・課題等	65
(ア) 本事業による一連の取り組みを通じて得られた知見・課題等	65
① 知見	65
② ワークショップ企画における課題	66
(イ) 今後の活動への展望	69
<参考資料>国内外事例調査	70
(ア) 海外調査報告	70
① 海外イノベーション創出拠点視察報告 (MIT Media Lab)	70
② 海外イノベーション創出拠点視察報告 (MINATEC, France)	73
(イ) 他大学及び機関によるワークショップ参加・情報収集に関する報告	77
① 電気通信大学・対話型ワークショップ	77
② 京都大学「第1回みんなのイシュー@大阪」	78
③ 首都大学東京「第2回HMI対話型ワークショップ」	80
④ 広島大学 対話型イノベーションワークショップ第3回	81
⑤ 慶應義塾大学 Open KiDS 幸せな社会をデザインするためのワークショップ	85
⑥ 株式会社イトーキオフィス総合研究所「SYNQA」情報収集	88

1. 当初計画の概要等

(ア) 背景

少子高齢化やエネルギー・環境問題の現実に対峙する中、人がポジティブに活動でき、幸せを享受できる社会構築に向け、そのマイルストーンを明確化することが喫緊の課題である。より感覚的に言えば、それは「我々がどのように生きたいか？ 我々の子供達の世代にどのような選択肢を残すことができるのか？ そのとき、人を包み込む「社会」はどのようなになっているのか？ 実現するためにはどんな技術が必要なのか？」ということを追究することに他ならない。一方、その社会の構成員・当事者であっても、必ずしもそのニーズを自覚しているとは言えない。本当に必要な社会ニーズは、社会や個人の中に埋もれている。このような状況の中、「埋もれたニーズ（潜在的ニーズ）をいかに感知し、見える化していくのか？」、今、正にその方法論の確立が求められている。大学の研究開発と、社会が求めるものとの間にかい離が見られる中、大学の教員が単に閉ざされた中での研究に留まることなく、社会の真なる声に耳を傾ける風土を醸成していくことが、我々の問題意識の根底にある。

本学では、対話型ワークショップの一つであるフューチャーセッションを平成 25 年 1 月より実施している。1 月に実施したフューチャーセッションにおいて、2 つの課題について議論を実施した。1 つは、「2025 年での少子高齢化社会」、もう 1 つは「2030 年名古屋の街がどのようなようになって欲しいか」であった。前者の課題に対する議論から生まれた「小さな社会 大きなつながり」というキーワードは、その後名古屋大学 COI 拠点のビジョンを貫くメインテーマとなった。一方、後者については、名古屋を大都市モデルとして取り扱い、他の過疎地モデルとの結果等と比較、分析している。通常、対話型ワークショップは、その構成員において完全に無作為あるいはバランスをとる。しかし、そこで得られる社会像は、文化や地域等にも大きく左右される。意図した母集団間の社会ニーズを描き、対立構造を明確化した上でイノベーションとの関連を議論していくことが不可欠である。特に、世界規模での地域間差違は、より大きな規模で真に必要な社会イノベーションの方向性を提示してくれる。

次に、フューチャーセッションで得られたイメージをより具体化するために、コンペティション手法を用いてアイデアを公募した。「2050 年のモビリティの姿と夢の先」を課題とした。本手法では、文章での応募はもとより、デザイン、造形物等より、人の感性に近いものでの提出を勧めた。本コンペティションでは、参加する人へのインセンティブ付与をはかるため、懸賞をもうけるとともに、民間企業の未来戦略関係部署担当者も審査員として取り込み、優秀賞のアイデアの具体化・見える化等で協力をいただいた。単に、アイデアを出すということから、アイデアを少しでも具体化（プロトタイプ化）することは、アイデアを提供する側からすれば、最大のインセンティブになる。

一方、本学では以前よりサイエンス・カフェ形式をとり、双方向の意見交換を重視する手法の採用も行ってきた。例えば、名古屋大学を中心として実施している「あいちサイエンスフェスティバル」では、秋の 5 週間毎日、合計 130 件以上のサイエンスイベントを開催し、実際の主役である市民の声を直接収集するしくみを採用している。

こうした実績を踏まえ、本学では社会イノベーションデザイン学センターを全学研究センターとして設置した。ここでは人文系教員の感覚の取り入れを図るとともに、東京芸術大学との連携センター化や NTT データ経営研究所の応用脳科学コンソーシアムとの連携研究を進めることにより、【工芸脳】を特徴とした体制を構築し、特徴的な対話型ワークショップ

プを実施していくことが決定している。

社会イノベーションデザインに対する取り組みが研究者に刺激を与え、日頃の研究にあたって、いつも未来志向となるよう、組織的かつ継続的な取り組みを推進すべく、本学ではそのインフラを整備しつつある。本事業では対話型ワークショップの実績を更に重ね、持続的な活動として確立するための方法論、手段を見出し習得する。活動の確立によって、社会を構成する様々な要素が顕在化し、研究者の思考そのものがバックキャストする。こうした研究者自身の社会ニーズに対する視点が洗練されることが重要である。研究テーマの設定や進め方にこの視点を反映させることにより、イノベーション創出が促進すると考える。また、研究者のみならずリサーチ・アドミニストレーター等、研究力促進を担う者の視点も養うことによって、人材を含めたインフラ整備に不可欠である。

(イ) 当初設定した事業の目的

多様な参加者の知見を活用したデザイン思考の対話型ワークショップ、講演会等を運営することなどにより「埋もれたニーズ」を具現化し、大学の研究成果に基づくシーズとマッチングさせて大学発イノベーションを創出する確率を高めることと、そのプロセスの検証を行うことを目的とした。

加えて、大学等の産学官連携活動における提案力・企画力の強化、地域社会との連携強化、リサーチアドミニストレーター(URA)や産学官連携コーディネーター(CD)のスキルアップを図ることを目指した。

(ウ) 実施体制

① 事業実施責任者

役職・氏名 名古屋大学 総長補佐・教授 齋藤永宏
(旧産学官連携推進本部 副本部長)

② 体制

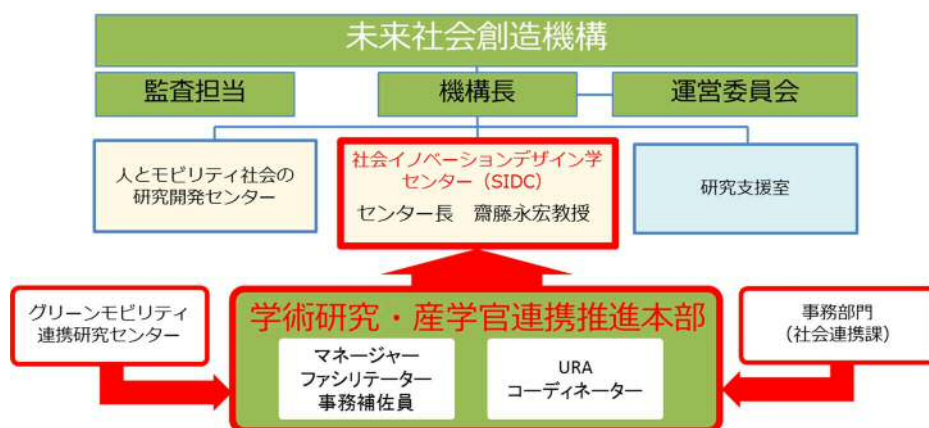


図 1 実施体制図

名古屋大学総長補佐(旧産学官連携推進本部副本部長)が事業実施責任者となり、直接の実施担当者は事業で採用した3名(マネージャー、ファシリテーター、事務補佐員)である。

また、学術研究・産学官連携推進本部に所属する URA が全面的支援を行った。加えて、グリーンモビリティ連携研究センターや各事務局による協力も得た。

③ 実施担当者

実施担当者は、以下表 1 の通りである。

表 1. 実施担当者一覧

No.	氏名	所属	事業項目	実施期間
1	齋藤永宏	名古屋大学 総長補佐	教授	実施責任者
2	岡田茜	学術研究・産学官連携推進本部	非常勤職員	本事業主担当者(マネージャー)
3	岡田敏克	同上	非常勤職員	ファシリテーター
4	山下良子	同上	非常勤職員	経費管理、イベント準備・運営等補助業務
5	Anyarat WATTANAPHANIT	グリーンモビリティ連携研究センター	特任助教	企画調査、ファシリテーター(タイ国実施/調査)
6	市野良一	同上	教授	企画調査(タイ国等実施/調査等)
7	吉田朋子	同上	准教授	企画調査(タイ国等実施/調査等)
8	原口哲之理	同上	特任教授	企画調査(タイ国等実施/調査等)
9	Helena Oi Lun Li	同上	講師	企画調査
10	岡田亜弥	国際開発研究科	教授	ワークショップの結果分析、企画調査
11	宇治原徹	工学研究科	教授	ワークショップの結果分析、企画調査
12	虎澤研示	学術研究・産学官連携推進本部	特任教授	企画、調整全般
13	吉田千穂	同上	URA	企画、立案、推進、調査
14	齋藤茂樹	同上	URA	企画、立案、推進
15	大住克史	同上	URA	ファシリテーター
16	天野優子	同上	URA	ファシリテーター
17	玉井克幸	同上	URA	人材育成、企画調査
18	戸次真一郎	同上	URA	サイエンスカフェの企画・実施
19	藤吉隆雄	同上	特任助教	サイエンスカフェの企画・実施
20	富田博明	研究協力部社会連携課	課長	各種イベントの計画・準備・実施、経理
21	前田敦子	同上	掛長	各種イベントの計画・準備・実施、経理

22	熱田信貴	同上	主任	各種イベントの計画・準備・実施、経理
----	------	----	----	--------------------

2. 当初計画の概要等

(ア) 事業全体の概要

① 目標

- ・ 「埋もれたニーズ」を具現化させるための研究推進体制の構築と実証活動の推進
- ・ 上記実証活動を現場で推進する URA や CD のスキルアップ

② 方法

1. ワークショップの開催

(1) 対話型ワークショップ（フューチャーセッション）

本学では、対話型ワークショップであるフューチャーセッションを日本の将来を担う若い世代を中心に学内の教員・研究者(理系・文系)、事務職員、大学院生などの協力を得ながら実施してきたが、引き続き全面的な支援を得て進めた。社会のニーズを多面的・複合的な観点からの把握に努め、できるだけ多様な参加者の招致に尽力した。

一方で、NTT データ経営研究所等学外の有識者を招いた広域ワークショップを実施した。理工系の研究者だけではなく、異分野かつ学外の研究者を交え、多面的な知識及び思考方法の知得を通し、幅広く深みのある社会ニーズの獲得を実施した。

フューチャーセッションは、国内では学内に焦点を当てたものを3回、広域に焦点を当てたものを2回開催した。前者のうち1回については、文部科学省が開発した「イノベーション開発ツール」を使用した。また、セッション後の振り返り、更には次のセッションに関するテーマ設定について、IBM「JAM」といったソーシャルビジネスツールによる創出を試みた。

加えて、フューチャーセッションから生まれた社会のニーズを「見える化」するために、クイックプロトタイピングを試みた。

(2) サイエンス・カフェの開催

サイエンス・カフェを実施している本学のグループと連携して、一般市民が参加するサイエンス・カフェにおいて市民の「埋もれたニーズ」を探るために、人文系あるいは文理融合型のテーマを取り上げ、3回開催した。

2. 人材育成

(1) リサーチ・アドミニストレーター(URA)およびコーディネーター(CD)

に対する人材育成

9月開催の文部科学省・慶應義塾大学主催の「イノベーション対話ワークショップ」に2名のURAが参加し、座学と実習によりワークショップのイメージを身につけ、ファシリテーション能力を高めると同時に、ネットワークを形成した。その後のネットワーキングはFacebookに設けられた専用グループ「イノベーション対話ワークショップ（メンバー以外非公開）」において、オンライン・コミュニティの形成に至っており、他大学の実務担当者との交流は継続している。また学内においては、今回の事業で確保するファシリテーターが中心となって、URAやCDを主たる参加者とするミニワークショップを開催して、URA/CDのスキル向上機会を設けた。その結果、URAがフューチャーセッションのファシリテーションを担うまでとなった。

3. 調査

(1) 海外ワークショップの開催及び調査

対話型ワークショップの実施地域が異なることによって、ワークショップの結果にもそれぞれの地域の特色が出ることを予想した。それは国内に留まらず、海外で実施することによってより色濃く特色が反映されるのではないかと想定し、日本とタイにおけるワークショップを比較分析することを計画した。これによって、地域差によって埋もれてしまっているニーズを発掘し、イノベーションを創出することに効果があると考えた。

そこで、タイ国の実情を調査するとともに、タイ国の現在の若者が高齢者になる2050年の社会を想定して「高齢化社会における子どもの暮らし」に焦点をあてたテーマを設定、チュラロンコン大学と連携して、対話型ワークショップを開催した。そして、ワークショップ及び調査の結果を日本に持ち帰り、日本の状況と対比しながらシーズ・ニーズ創出に役立てた。

4. 先行事例調査

イノベーション創出のために、理工系だけではなく文理連携・融合を通じて、社会的ニーズの具現化と社会実装の方法論の構築に取り組んでいるアメリカやヨーロッパの先進的な事例を調査した。具体的には2箇所の事例調査を実施した。1箇所はアメリカのマサチューセッツ工科大学メディアラボ、もう1箇所はフランスのMINATECである。調査結果は第4章にて報告する。

3. ワークショップ実施状況

(ア) 概要

① 全体像

1. 概念

本事業では、多様な参加者の知見を活用したデザイン思考の対話型ワークショップ等を運営し、持続的な活動として確立するための方法論および手段を見出すことによって「埋もれたニーズ」を具現化し、大学の研究シーズとマッチングさせて大学発イノベーションを創出する確率を高めること、そしてそのプロセスの検証を行うことを目的とした。本学ではこれまでの実績を踏襲し、イノベーション創出の加速を促すために、社会イノベーションデザイン学センターという持続的活動の拠点を設立した。社会イノベーションデザイン学における研究開発プロセスは、図2のように定義されている。本事業でもこの定義を元に活動の方針を定めた。具体的には、この定義のうち①社会ニーズ分析および②プロトタイピングの「解決策の具現化と洗練」が本事業による活動に匹敵するものとして捉えた。社会イノベーションデザイン学の研究開発の定義をPDCAサイクルとして捉え直し、更に①社会ニーズ分析のあり方を明示した。その結果が図3である。PDCAサイクルの過程として①から③までを当てはめた。③社会システム開発のコスト検証、ビジネスモデル検証の結果を踏まえ、再び①社会ニーズ分析に戻るケース、または④社会実装へ挑戦するケースと2パターンを想定している。また、本事業で実施する①社会ニーズ分析は更に3つの段階に分けた。それは「社会ニーズ発掘」「テーマ選定」「テーマ企画」であり、対話型ワークショップを通じてそれぞれ社会ニーズ、テーマの選出、テーマの深堀を目指すものである。これら段階の考え方として根底にあるのはデザイン思考で馴染みのあるU理論¹の「Pay attention」「Seeing」「Sensing」「Presencing」「Crystallizing」というステータスである。我々はこうした思考に基づき対話型ワークショップの企画運営を実施し、そこから創出される成果がイノベーション創出を加速させるものとなることを目指した。

¹ U理論とはマサチューセッツ工科大学オットー・シャーマー氏によって提唱されたものである。詳細については以下を参照のこと。Presencing Institute Community Japan <http://www.presencingcomjapan.org/utheory/>

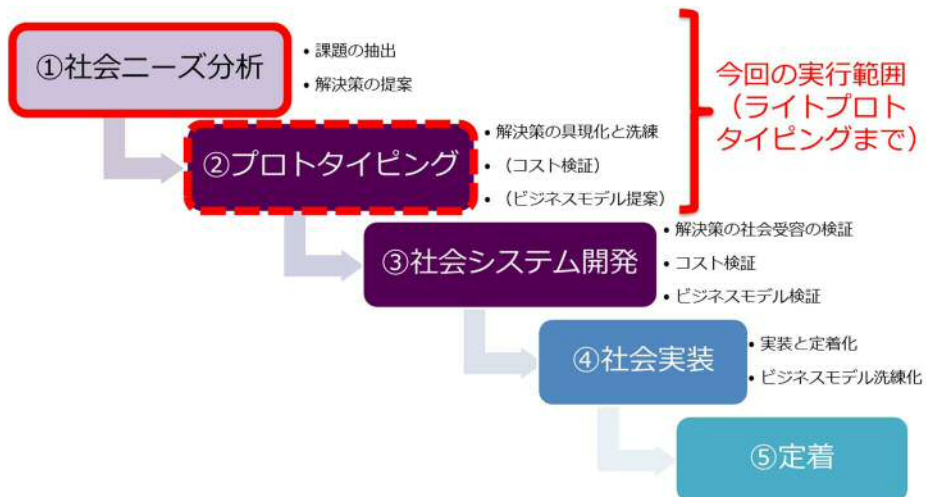


図 2. 社会イノベーションデザイン学の研究開発の定義

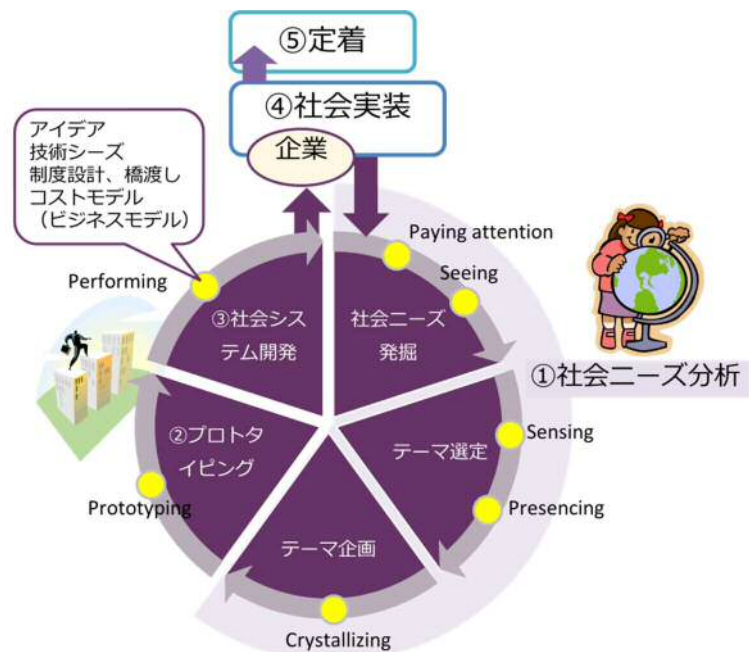


図 3. 社会ニーズ分析に対する定義（活動の PDCA サイクル）

2. 実施内容および実施回数

名古屋大学で実施したワークショップについて、その区分を次の 5 つに定義した。

(1) 学内ワークショップ

参加者として主に教員・学生・URA を対象としたワークショップである。運営側の狙いとして、学術研究に携わる者の観点から 2030 年の高齢化社会を捉えた時、どのような構想が描かれ、それに向けた学術研究のあり方をどう考えるのか、という点に注視した。また、こうした対話型ワークショップという手法を学術研究に浸透させるための啓蒙活動的意義も重ねた。

(2) 広域ワークショップ

参加者として一般市民を対象としたワークショップである。運営側の狙いとして、企業や団体、NPOなどに所属する多様な社会構成員が集い、2030年の高齢化社会のあり方を議論した時にどのような構想が描かれ、複雑化する社会構成要素をどのように組み合わせることによって課題が解決していくと考えるのか、という点に注視した。また、こうした対話型ワークショップを大学が実施することにより、一般市民に開かれた大学のあり方についても意見をもらう機会として捉えた。

(3) 国際ワークショップ

参加者として海外の大学関係者（教員・職員・学生）および名古屋大学関係者（教員・学生・URA）を対象としたワークショップである。今回は、海外の大学としてタイのチュラロンコン大学を設定した。運営側の狙いとして、学術研究に携わる者を中心に、タイと日本のそれぞれの観点から2030年の高齢化社会を捉え、より具体的なテーマ（第1回「教育」、第2回「医療」）を設定して議論をしたとき、両国間の差異がどのように浮かび上がるのか、という点を注視した。

(4) オンラインワークショップ

参加者として主に上述(1)および(2)のワークショップ参加者を対象とした、Web上で実施されるワークショップである。運営側の狙いとして、Face to faceでのワークショップはその場かぎりの議論になりがちな傾向があるため、持続的・継続的活動として議論の場を確立するために、Webによるオンラインワークショップを実施した。

(5) サイエンス・カフェ

参加者として主に一般市民を対象とし、レクチャーには大学関係者（主に名古屋大学教員）を設定した。サイエンス・カフェは研究のアウトリーチ活動の一種であり、主流な手法である。名古屋大学でも学術研究・産学官連携推進本部で推進しており、例えば2011年より毎秋、名古屋大学を中心として「あいちサイエンスフェスティバル」を実施している。秋の5週間毎日、合計130件以上のサイエンスイベントを開催し、実際の主役である一般市民の声を直接収集するしくみを採用している。これとは別に、1~2ヶ月に1回の割合でサイエンス・カフェを実施したり、また一般公開授業の大々的なイベントを年1回開催している。今回は、サイエンス・カフェに集う一般市民の観点から2030年の高齢化社会を捉えた時、テーマとなった研究シーズがどのように役に立つ可能性があるのか、ということを直接聞く機会を設定した。

各ワークショップ区分について、実施回数は表2の通りである。

表 2. ワークショップ区分別実施回数

ワークショップ区分	実施回数	合計
学内ワークショップ（学生・URA）	1回	9回
学内ワークショップ（教員）	2回	
広域ワークショップ	2回	
国際ワークショップ	2回	
オンラインワークショップ	2回	
サイエンス・カフェ	3回	3回

3. 開催実績

ワークショップの開催実績を時系列にまとめたものが図4である。

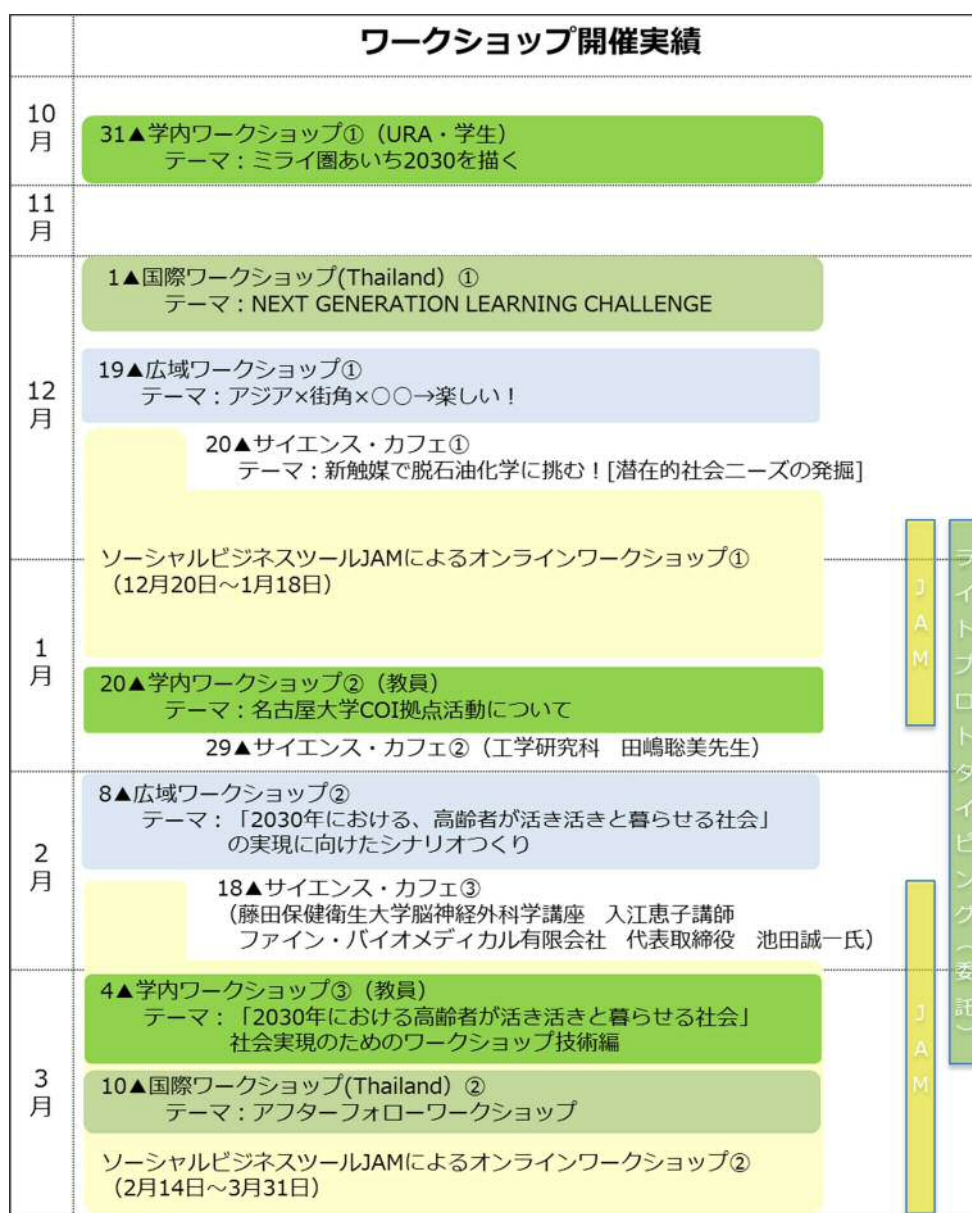


図 4. ワークショップ開催実績

(イ) ワークショップ詳細

① 第1回学内ワークショップ

ア. ワークショップ概要

名称	第1回学内ワークショップ（通算第1回）											
実施日時	平成25年10月31日（木）14:00～17:00											
目的・テーマ	ミライ圏あいち2030を描く											
仮説・狙い	潜在的な社会ニーズをくみ取るにあたり、1) 個人の願いを超えて「私たち（for us）」にとっての望ましい未来とはどのようなものかを探る、2) 環境・エネルギー・健康・少子化…といった個別テーマを超えて「望ましい未来社会の全体像」を自由に描く、ことを目的とした。											
使用した対話の手法について												
<p>設定した3つのテーマについて、ポストイット等に自由な発想やアイデアを書き出す個人ワークをもとに、4～5名の小グループでのディスカッションを踏まえ、グループで見えてきたことを模造紙に書き出してもらった。</p> <p>特に、個人ワークにおいて、参加者一人ひとりの「内なるイメージ」を引き出すことに重点を置いた。</p>												
参加者の状況												
	所属機関・部署等	19歳以下		20歳～39歳		40歳～59歳		60歳～		合計		
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	合計
a	自然科学系研究者				1	2				2	1	3
b	人文・社会系研究者									0	0	0
c	技術系職員							1		1	0	1
d	事務系職員			2	1		2	2		4	3	7
e	大学等 リサーチ・アドミニストレーター(URA)			2	5	1		1		4	5	9
f	産学官連携コーディネーター							1		1	0	1
g	学生(大学院博士課程、修士課程、学部生)			13	7					13	7	20
h	上記a～g以外									0	0	0
i	不明									0	0	0
j	企業 研究開発部門									0	0	0
k	事業企画部門									0	0	0
l	経営部門									0	0	0
m	上記～l以外									0	0	0
n	不明									0	0	0
o	TLO									0	0	0
p	地方公共団体(公設試験研究機関を除く)									0	0	0
q	公設試験研究機関									0	0	0
r	財団法人・第3セクター等									0	0	0
s	そのほか(a～rのいずれにも該当しないような場合)				1					0	1	1
合計		0	0	17	15	3	2	5	0	25	17	42

会場

本学ベンチャービジネスラボラトリー内ベンチャーホール



スケジュール

- 14:00 開会・ガイダンス
- 14:15 アイスブレイキング
- 14:30 対話セッション1「今って、どんな時代だろう？」
- 14:55 対話セッション2「このままいくと、ミライはどうなる…!？」
- 15:20 対話セッション3「ワタシの願いが叶うとき」
- 16:30 発表&全体シェア
- 17:00 閉会

ファシリテーターについて

メインとサブのファシリテーター2名により運営した。メインファシリテーターは、元地方シンクタンク研究員として、市民参加型まちづくりワークショップの企画・運営に従事した経験を持つ。サブファシリテーターは本学UR Aが担当した。

ファシリテーションの実施状況

主としてメインファシリテーターが全体進行を司り、適宜サブファシリテーターが参加者のコメントを引き出すなど、役割分担をしながら進行した。2名でファシリテートしたことで、一本調子にならず、心地よいテンポが生まれた。また、当初の想定よりも多数の参加者があり、グループ数が増えたが、2名体制により、余裕を持って全体をファシリテートすることができた。

イ. ワークショップの検証

設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証

目的	設定したテーマがあまりに広く、漠然としていたため、参加者にとってはややつかみどころのない議論に陥ってしまった。
方法論	客観的なデータや論理的思考にとらわれず、自由な発想や感性を駆使して「望ましい未来の社会像」をイメージしてもらうことを狙ったが、参加者にとっては不慣れな面もあり、イメージを十分引き出すことができなかった。
手段	個人ワークを踏まえて、丁寧にグループディスカッションを重ねる手法は、オーソドックスなものであり新奇性はないものの、適切であったと考える。ただし上述したとおり、テーマ設定やイメージを膨らませるためのプログラムについては改善の余地がある。

ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点（インサイト）が得られたか。

結果として多様な意見が出され、参加者にとっての「望ましい未来像」の一端はつかむことができたと考える。ただし、出された意見の多くはすでにメディア等と言われて

いることであり、「新たな視点、インサイト」と言えるほどのオリジナルな視点はあまり見られなかった。テーマが広すぎたことと、プログラムが十分こなれておらず、参加者の内なるイメージを十分引き出せなかったことが原因と考えられる。

ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあったか

今回、多様な参加者が集まり、学部・研究室の違いや、学生・職員（URA など）・教員といった立場の違いを越えた自由なディスカッションを通じて交流を図ることができた。また、留学生の参加も多く、国際的な視点からの意見も聞くことができた。

上述したように、テーマ設定およびプログラムについては、参加者が無理なく取り組めるよう改善する必要がある。

また、今回は開催決定から実施までの時間的余裕がなく、学外への参加呼びかけができなかった。多様な社会的ニーズを把握するためには、学外の企業人や一般市民の参加を呼びかける必要がある。

上記課題・改善点を実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか

次のワークショップ（第1回広域ワークショップ）では、参加者が無理なく発想できるよう、テーマをより具体的にし、プログラムもより身近な経験から発想できるよう改善した。

また、参加者については、学外の企業人等への参加を働きかけた。

参加者からの意見の集約

（1）ワークショップを通じた気づきや発見について（主な意見の抜粋）

- ・様々な年代、性別の方と議論して、全く異なった意見はもちろんのこと、共通する意見もそういった人らが持っていたことを発見できてよかった。
- ・多国籍の人の意見は参考になった。
- ・年を重ねている方の意見は具体的なことが多いと感じた。
- ・自分にはない感性からうまれる意見にふれることができ、おもしろかったです。
- ・意見を出す人のバイタリティの違いで、より自分が楽を出来る方の未来か、より自分があらゆる事に対して多く取りくめるようにする方の未来か、どちらを選ぶかが違って面白かった。
- ・学生が多く、「若者」の考えにふれることができた。文系の学生さんの意見が新鮮だった。研究や教育の意見にかたよると予想していたが、環境、世界平和などと幅広い視野が広い意見が多かったのが印象に残った。
- ・人によって考え方がこんなに違うんだと気づきました。特に理系の人と文系の人では全然違った。
- ・上手く同テーブル内の参加者の属性（性別、年代）が分かれたので、多様な意見が面白かった。
- ・目の前の現実ばかり考えて未来のことを考えることがこれまであまりなかったことに気がついた。
- ・世代を越えて対話することの大切さ

（2）ワークショップの運営面についての改善点（主な意見の抜粋）

- ・何を目指すのにもよるが、出席者のバリエーションがもう少し多くても良いのではないか。
- ・定期的2ヶ月に1回位、行ったらと思う。
- ・もっと色々な立場の人を呼んでできたらいいと思う。
- ・文系学生に向けても是非告知して下さい。
- ・参加者、メンバーの年代、職種にもっと幅をもたせてもいいのかも。

- ・対象者が外国の留学生がふえるといいと思います
- ・今後はより幅広い参加者をつのればもっとおもしろくなると思った。

ウ. ワークショップのアウトプット等

産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

ワークショップで出された「2030年に実現してほしいこと（私の願い）」を、テーマ・分野別に分類したところ、以下の結果が得られた。

テーマ・分野別	意見数	特徴的な意見（抜粋）
幸福	15	「ゆっくり働ける社会が実現していたら、趣味の時間が増える。」 「子どもがいても生き生き働ける社会が実現していたら、女性がもっと活躍できる。」 「世界の人々が寛容な気持ちとお互いを理解する姿勢を持って暮らすことができれば、私は幸せ。」
利便性	12	「何でもボタンを押すと出てくる電子レンジが実現していたら、食料に困らない。」 「本当のドラエもんが実現していたら、すべての問題が解決できる。」 「時差をなくす技術が実現していたら、ビジネスマンはラク。」
情報・コミュニケーション	10	「動物と会話できるデバイスが実現していたら、人間は環境に優しくできる。」 「相手の意志が読み取れる機器が実現していたら、人間関係がスムーズになり楽しい生活ができる。」 「思ったことがすぐに正確に伝わる世界が実現していたら、小さいいさかいがなくなる。」
医療・健康	9	「何もしなくても理想の体型になる装置・薬が実現していたら、私は幸せ。」 「眠らなくても体調がよい体質の開発が実現していたら、何にでも挑戦する。」 「人間の身体の機能を調整するチップが実現していたら、老若男女関わらず今を楽しめる。」
環境・生態系	8	「すべての動物の位置がわかると、みんなが動物に興味を持つ。」 「人間以外の生き物への理解が深まったら、無駄に命をおとす生物が減る。」 「スマートコミュニティが実現していたら、環境汚染が止まる。」
食	6	「家庭内自給自足生活が実現していたら、も

		<p>っとルーズに仕事ができる。」</p> <p>「昆虫食の一般化が実現していたら、新産業の創出。」</p> <p>「野菜や豆腐などで肉の味を作ることが実現していたら、人間の食物として生きている動物はなくなる。」</p>
モビリティ	6	<p>「自動運転車、同時通訳器が実現していたら、楽しい生活ができる。」</p> <p>「どこでもドアが実現していたら、世界中どこでも旅行できる。」</p> <p>「自動車事故減少が実現していたら、安心して歩ける。」</p>
宇宙	6	<p>「月や火星への移住が実現していたら、人口過密が解消する。」</p> <p>「宇宙旅行が実現していたら、行きたい。」</p>
エネルギー	5	<p>「あらゆるものを燃料にできる家庭用発電機が実現していたら、とても便利。」</p> <p>「クリーンな発動機のみで電気がまかなえる世界が実現していたら、地球が幸せになる。」</p>
安全・安心	4	<p>「近所（近隣）の人と相互協力、そういうネットワークツールが実現していたら、心がホット、犯罪防止。」</p>
高齢化	3	<p>「ロボットと共存できる社会が実現していたら、高齢者が暮らしやすい。」</p>
都市・コミュニティ	3	<p>「空の町や海の町が実現していたら、おもしろい。」</p>
文化	2	<p>「グローバル化の中で伝統文化が残ったら、私は幸せ。」</p>
楽しみ・娯楽	2	<p>「実体験型のテレビゲームが実現していたら、子どもからお年寄りまでだれもが楽しめる。」</p>
教育	1	<p>「教育の改善が実現していたら、日本が良くなる。」</p>

発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか

本ワークショップは試行的な意味合いもあり、ひとまず参加者の潜在的ニーズがどういった分野・方面にあるのかを把握するために成果を活用した。傾向としては、「幸福」「利便性」「情報・コミュニケーション」「医療・健康」への関心が高いことが分かった。

上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

第1回広域ワークショップでは、本ワークショップで得られたアイデア・発想を、より具体的な形で街角にどのようにビルトインするかを検討した。

② 第2回学内ワークショップ

ア. ワークショップ概要

名称	第2回学内ワークショップ (SIDC 全体会議)										
実施日時	平成26年1月20日(月) 14:00~18:00										
目的・テーマ	大学の研究者と産業界は、どのように連携すれば社会実装を目指すプロジェクト・研究領域を展開できるか、ブレインストーミングする。										
仮説・狙い	潜在的な社会ニーズを拾い上げ、イノベーションを創出し社会実装するには、産学の協働が必須となる。産・学の参加者が同じテーブルに着き、ブレインストーミングすることで、協働の方法論・役割分担が見出されるものと思われる。今回は、シーズ・ニーズ事業で中心的な産・学メンバーを参加者にワークショップを実施し、今後、本学の社会イノベーションデザイン学センターにて、本格的に産学で社会イノベーションを実現するための、プロセスを考える。										
使用した対話の手法について											
各参加者から、研究領域、ミニプロジェクト案についてプレゼンテーション(議論の前提のすり合わせ) 6,7人のグループに分かれ、ブレインストーミングおよびグループディスカッション グループ間共有											
参加者の状況											
	所属機関・部署等		20歳~39歳		40歳~59歳		60歳~		合計		
			男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	合計
a	大学等	自然科学系研究者	5	2	8	2	3		16	4	20
b		人文・社会系研究者	0	0	2	1	0	0	2	1	3
d		事務系職員	1	2	3	0	2	0	6	2	8
e		リサーチ・アドミニストレーター (URA)	0	1	1	0	1	0	2	1	3
j	企業	研究開発部門	0	0	1	0	0	0	1	0	1
k		事業企画部門	1	0	1	0	0	0	2	0	2
l		経営部門	0	0	0	0	1	0	1	0	1
m		上記j~l以外	0	0	6	0	0	0	6	0	6
s	そのほか(a~rのいずれにも該当しないような場合)		0	0	0	1	0	0	0	1	1
合計			7	5	22	4	7	0	36	9	45

会場



ファシリテーターから説明
介



学内研究者によるミニプロジェクト紹介



学外参加者による研究領域プレゼンテーション



グループワーク

スケジュール

- 14:00-14:05 開会挨拶
- 14:05-14:20 参加者自己紹介 (アイスブレイキング)
- 14:20-14:50 趣旨と全体説明 (議論の前提の説明)
- 14:50-16:20 議論の前提のすり合わせ①
学内研究者によるミニプロジェクト紹介
- 16:20-16:30 休憩
- 16:30-17:10 議論の前提のすり合わせ②
学外参加者による研究領域プレゼンテーション
- 17:10-17:50 グループワーク
ブレインストーミング、ディスカッション
- 17:50-18:00 全体共有

ファシリテーターについて

- トータルファシリテーター
齋藤永宏 教授 (名古屋大学 総長補佐)
- テーブルファシリテーター
上野智永 グリーンモビリティ連携研究センター
辻 信一 グリーンモビリティ連携研究センター
Li Oi Lun Helena グリーンモビリティ連携研究センター
岡田 茜 学術研究・産学官連携推進本部

吉田千穂 学術研究・産学官連携推進本部
玉井克幸 学術研究・産学官連携推進本部
ファシリテーションの実施状況
トータルファシリテーターの指示の下、テーブルファシリテーターが、各グループのブレインストーミング、ディスカッション等を進行した。参加者の協力のもと、質の高いディスカッションができたが、時間が足りず、結論への収束がやや十分ではなかった。

イ. ワークショップの検証

設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証	
目的	大学の研究者と産業界とで、社会実装を目指すプロジェクト・研究領域をいかに展開できるかをブレインストーミングし、ディスカッションすることを目的とした。産・学ともに、互いの研究分野、プロジェクト案に興味を示し、連携を模索する旨、確認するに至ったが、具体的な道筋についてはこれからの課題となった。
方法論	トータルファシリテーターの指示の下、テーブルファシリテーターが、各グループのブレインストーミング・ディスカッションをリードし、ミニプロジェクトの推進と社会実装に向けた産・学の協働の方法論・役割分担を議論したが、時間が足りず、具体的な結論を見出すには至らなかった。時間配分について、次回以降改良する必要がある。
手段	グループディスカッションの形式を取ったが、各テーブルのメンバーは、様々な分野からの視点で議論できるよう、予め主催者側で割り振りをした。様々な分野間での連携・協働の可能性が議論されたことは、効果的なポイントであった。一方で、具体論に落とし込むことが困難であった。
ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点（インサイト）が得られたか。	
<ul style="list-style-type: none"> 企業では生まれにくいようなプロジェクトを進め、社会実装へ向け、産・学で協働する。 研究領域・参加者の多様性が、これまでに無かった発想を得るためのキーファクター。 1つでも、小さいものでも積み上げて、社会実装できるいい成果を出す必要がある。 	
ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあつたか	
<ul style="list-style-type: none"> 議論を尽くすには、時間が短かった。ワークショップ全体の時間配分と設計を見直す必要がある。 深い議論を促すためには、ファシリテーターの力量も重要なファクターである。よりよいワークショップを目指し、ファシリテーションの技術を向上させる機会を作ること必要である。 	
上記課題・改善点を実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか	
<ul style="list-style-type: none"> ワークショップの開催・実施で著名な外部の方からの助言を取り入れて、ワークショップの設計を試みることにした。 	
参加者からの意見の集約	
<ul style="list-style-type: none"> ダイバーシティが重要。ジョブスは詩人やデザイナー、アーティストも近くに居たから革新的なことができた。 発想豊かな学生が、名古屋大学に在学している。学生をプロジェクトの推進力に。 課題を乗り越えれば、優れた事業家に結びつく。 	

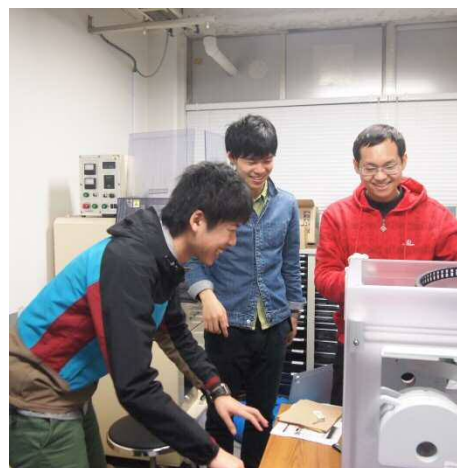
ウ. ワークショップのアウトプット等

産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

- 高齢者で問題となる病気に視覚障害がある。健康寿命、自動車運転寿命の延長には、視野が悪くなる疾患に対するテクノロジーの開発を、産学連携で進めたい。
- 日本の企業には、脳科学の専門家が不在。産学連携で、脳科学の産業化を進められないか。
- 高齢者の入浴介護に展開できる科学・技術を産学で開発できないか。

発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか

産学のみならず、学学連携、産学金連携も含め、アイデア・コンセプトのプロトタイプ化について、継続的に議論を進めている。本ワークショップで披露された研究アイデアのうち、一つは3Dプリンターによるプロトタイピングも実施された。「無線充電携帯」のアイデア発案者である研究者（宇治原徹教授）の研究室にて、3Dプリンターによるクイックプロトタイピングを実施し、アイデアの具現化を試みた。



上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

たとえ、小さなイノベーションでも社会実装できるよう、引き続き産学での議論を実施する必要がある。確実に成果に結びつくよう、分野・テーマを絞ったワークショップやプロトタイピングに向けたワークショップ等の開催を実施する予定である。

③ 第3回学内ワークショップ

ア. ワークショップ概要

名称	第3回学内ワークショップ（通算第7回）
実施日時	平成26年3月4日（火）13:00～17:15
目的・テーマ	「2030年における高齢者が活き活きと暮らせる」社会実現のためのワークショップ 技術編
仮説・狙い	2月8日に実施した第2回広域ワークショップの結果を、専門家ですらに議論し、2030年における社会を実現するためには、誰が何をどうしなければならないか検討し、戦略を立てることを目的とする。

使用した対話の手法について

- ・ 専門家によるブレインストーミング
- ・ 専門分野ごとのグループ討議
- ・ 全体討議（グループ間での情報共有）

参加者の状況

	所属機関・部署等		20歳～39歳		40歳～59歳		60歳～		合計		
			男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	合計
a	大学等	自然科学系研究者	11	4	8	2	0	0	19	6	25
e		リサーチ・アドミニストレーター（URA）	2	1	2	0	0	0	4	1	5
j	企業	研究開発部門	0	0	3	0	0	0	3	0	3
合計			13	5	13	2	0	0	26	7	33

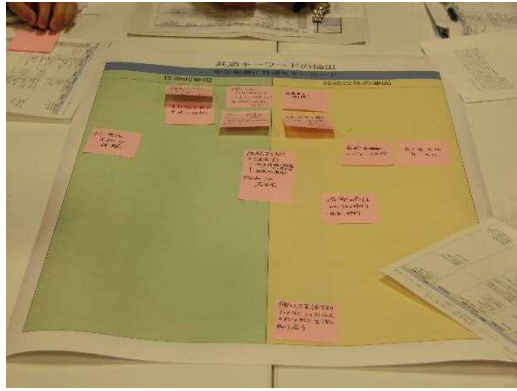
会場



ワークショップ全体の風景



ファシリテーターとの議論



Key factor 抽出

	アヲチナ 保箱	アヲチナ 人材 バンク	アヲチナ シェア ハウス	アヲチナ リモコン システム	アヲチナ アノカル リポート	計
アヲチナ 保箱	1	5	7	7	3	23
アヲチナ 人材 バンク	0.2	1	5	3	3	12.2
アヲチナ シェア ハウス	0.1	0.2	1	5	5	11.3
アヲチナ リモコン システム	0.1	0.3	0.2	1	0.2	1.8
アヲチナ アノカル リポート	0.3	0.3	0.2	5	1	6.8

AHP 法による順位付け



ステークホルダーの戦略



グループプレゼンテーション

スケジュール

13:00-13:05	開催挨拶 齋藤永宏 (名古屋大学 総長補佐・教授)
13:05-13:25	進め方の説明 浦島邦子 (客員教授、科学技術・学術政策研究所、フォーサイトセンター長補佐)
13:25-16:15	グループワーク①モビリティ、②情報技術、③人間工学、④ハウジング、⑤その他 ・自己紹介 ・社会像ごとに技術とそれ以外の項目を抽出(Key factor) ・Key factor を実現するための要因検討 (Driving force) ・Key factor と Driving force をあわせて、重要性と実現性を検討 ・シナリオ作成 ・シナリオを実現するための戦略検討 ・まとめ
16:15-17:00	グループプレゼンテーション、ディスカッション
17:00-17:10	総評 浦島邦子 (客員教授、科学技術・学術政策研究所、フォーサイトセンター長補佐)
17:10-17:15	閉会挨拶 齋藤永宏 (名古屋大学 総長補佐・教授)

ファシリテーターについて	
トータルファシリテーター	浦島邦子（客員教授、科学技術・学術政策研究所、フォーサイトセンター長補佐）
テーブルファシリテーター	辻 信一（グリーンモビリティ連携研究センター SURA） 石島寿道（COI 拠点設立準備室 URA） 富田竜太郎（COI 拠点設立準備室 URA） 玉井克幸（学術研究・産学官連携推進本部 URA） 吉田千穂（学術研究・産学官連携推進本部 URA）
ファシリテーションの実施状況	
	専門分野ごとでのグループディスカッションを推進するため、今ワークショップでは、テーブルごとにファシリテーターを配置し、テーマの深耕を図る形式をとったが、ブレインストーミングやディスカッションの進め方等、グループ間で若干の際が生じた。臨機応変な対応であった一方、ファシリテーター間で進め方の共有を強化する必要がある。

イ. ワークショップの検証

設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証	
目的	2月8日に実施した第2回広域ワークショップの結果を、専門家でさらに議論し、2030年における社会を実現するためには、誰が何をどうしなければならないか検討し、戦略を立てることを目的とする。
方法論	<ul style="list-style-type: none"> • 専門家によるブレインストーミング • 要因分析 • AHP 法 • グループプレゼンテーション • 振り返り
手段	<ul style="list-style-type: none"> • モビリティ、情報技術、人間工学、ハウジング分野の4つの専門家グループと、その他のグループ、計5グループを編成。それぞれにテーブルファシリテーターを配置。 • 社会像ごとに技術とそれ以外の項目を抽出(Key factor) • 実現するにはどんなことが要因か検討 (Driving force) • キーフアクターとドライビングに対し、その重要性和実現性を検討・プロット • プロットに対しシナリオ作成 • シナリオを実現するための戦略検討 • グループプレゼンテーション
ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点（インサイト）が得られたか。	
	2月8日に非専門家を対象にした実施した第2回広域ワークショップの結果とともに、専門家で議論した。専門家ならではの視点で、高齢者ベンチャー起業、モバイルセンサ技術、水を使わない洗濯機、アシスト住宅等のアイデアが出された。
ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあったか	
	専門分野ごとでのグループディスカッションを推進するため、今ワークショップでは、テーブルごとにファシリテーターを配置し、テーマの深耕を図る形式をとったが、ブレインストーミングやディスカッションの進め方等、グループ間で若干の際が生じ

た。臨機応変な対応であった一方、ファシリテーター間で進め方の共有を強化する必要がある。

ブレインストーミングの後、議論を進めるに従い、とがった意見、面白いアイデアが見失われ、丸まったストーリーになってしまう。とがったアイデアを抽出する作業が必要。また、本来2日掛けて実施されるべきものを半日に短縮して実施したことで、議論が尽くされなかった。ワークショップ全体のデザインを再考する必要がある。

上記課題・改善点を実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか

ファシリテーター間で、シミュレーションを実施して、不明確な点を洗い出し、ワークショップの制度を上げる。

今後のワークショップにおいては、内容、時間配分等ワークショップ全体を、精度を上げてデザインする。

参加者からの意見の集約

- 多くのキーワードが集約されてよいアイデアが多数出た。
- 戦略レベルまでの掘り下げやそこに至る説明は各チームともによくできていた。など

ウ. ワークショップのアウトプット等

産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

2030年の社会を専門家によってブレインストーミングしたため、より具体的なアイデアが多数出された。オンデマンド自動運転タクシー、水を使わない洗濯機、介護ロボット、地域包括ケアシステムなど、地域企業との共同研究に繋がれそうなアイデアも多数あった。

発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか

グループプレゼンテーションで報告されたアイデアのみならず、ブレインストーミングで出されたとがったアイデアも再度評価し、プロトタイピングや産学協同研究に結びける可能性を、精査する予定である。

上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

今ワークショップの結果について、プロトタイピングや産学協同研究に結びける可能性を、精査する予定であるが、プロトタイプワークショップの実施にあたっては、とがったアイデアについても十分に検討できるよう、ワークショップ全体のデザインを行うこととする。

④ 第1回広域ワークショップ

ア. ワークショップ概要

名称	第1回ワークショップ（通算第3回）
実施日時	平成25年12月19日（木）13:30～17:00
目的・テーマ	「アジア×街角×〇〇〇→楽しい！」
仮説・狙い	第1回、第2回で得られたアイデア・発想を踏まえ、それらを実際の街角にどのようにビルトインするかを検討する。そのことによって、「未来の活気あふれる（楽しい！）アジアの街角」の原型をデザインする。

使用した対話の手法について

基本的にはブレインストーミングを採用した。設定した3つのテーマについて、それぞれ、個人ワークでアイデア・発想をうながし、それをグループワークで模造紙上に出し合いながら、ブレインストーミングを行った。緊張感とスピード感を持ってブレインストーミングを行うため、壁際に模造紙を貼りだし、参加者には立った状態でディスカッションしてもらった。また、アイデアを練る段階では、設定した場面の登場人物を自ら演じてみるなど、ロールプレイ手法も取り入れた。

参加者の状況

	所属機関・部署等	19歳以下		20歳～39歳		40歳～59歳		60歳～		合計		
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	合計
a	自然科学系研究者				1	1				1	1	2
b	人文・社会系研究者									0	0	0
c	技術系職員									0	0	0
d	事務系職員				1	1	1	2		3	2	5
e	大学等 リサーチ・アドミニストレーター(URA)				1	1				1	1	2
f	産学官連携コーディネーター									0	0	0
g	学生(大学院博士課程、修士課程、学部生)			18	4					18	4	22
h	上記a～g以外									0	0	0
i	不明									0	0	0
j	企業等 研究開発部門				2	1	3			5	1	6
k	事業企画部門						1			1	0	1
l	経営部門				1			1		2	0	2
m	上記～l以外				1					1	0	1
n	不明									0	0	0
o	TLO									0	0	0
p	地方公共団体(公設試験研究機関を除く)				1		4			5	0	5
q	公設試験研究機関									0	0	0
r	財団法人・第3セクター等									0	0	0
s	そのほか(a～rのいずれにも該当しないような場合)									0	0	0
合計		0	0	23	8	11	1	3	0	37	9	46

会場

トヨタテクノミュージアム 産業技術記念館 ホールB



スケジュール	
13:30	開会・ガイダンス
13:40	ブレインストーミング 1 「皆さんが行ってみたい街角は？」
14:10	ブレインストーミング 2 「みんなが集まる街角には何があればいい？」
14:50	コーヒーブレイク
15:10	ブレインストーミング 3 「〇〇〇に何かを入れると何ができる？」
15:40	アイデアを絵にする
16:00	グループ発表&全体共有
16:35	今後の進め方
17:00	閉会
ファシリテーターについて	
ファシリテーター 1 名 (URA)、補助 1 名 (本学教授) により運営した。	
ファシリテーションの実施状況	
<p>今回担当したファシリテーター 2 名とも、いわゆるワークショップ形式でのファシリテーションの経験はほとんどなかったが、特に問題なく進行することができた。</p> <p>ただし、事前に 2 名の間でイメージのすりあわせが十分できておらず、細かな点ではどちらがリードするかややとまどう場面も見受けられた。その場の状況を見極めながらアドリブで対応することができたが、ファシリテーションの質をさらに上げるためには、事前のイメージ共有を十分行うことが課題である。</p>	

イ. ワークショップの検証

設計に当たっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証	
目的	第 1 回学内ワークショップの反省をふまえ、参加者が無理なく発想できるようなテーマ設定を行ったため、比較的スムーズに参加者のアイデア・イメージを引き出すことができた。ただし、趣旨説明において「アジア」という視点をあまり強調しなかったこともあり、場所性（地域性）に限定されない「未来の街角」のイメージが浮かび上がった。そのため、ややリアリティに欠ける面があった。
方法論	参加者の多くは本学学生であったが、学外からの企業人参加者も多く、それらが刺激し合って活発なブレインストーミングが行われた。
手段	立ったままブレインストーミングを行ったことあり、(グループ間で若干の差はあるものの) おおむねどのグループも議論が活性化し、フレッシュなアイデア創出に効果があったと考えられる。
ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点 (インサイト) が得られたか。	
<p>ワークショップを通じて、魅力的な街角を構成する要素として「非日常性 (ワクワク感)」と「癒やし (やすらぎ・安心感)」の二面性が重要であることが見えてきた。</p> <p>こうした視点を得られた要因として、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 若い参加者の自由な発想を引き出すファシリテーションがうまく機能したこと 2) 各グループ 1 名以上、企業人を配置したことにより、若い学生と経験豊かな企業人との間で奥行きのあるディスカッションが成立したこと 3) 立ったまま行うブレインストーミングなど、集中力とスピード感を重視したプログラムがうまく機能したこと <p>の 3 点が考えられる。</p>	

ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあったか

会場のトヨタテクノミュージアムは、古い赤煉瓦の建物をリニューアルした趣のある建築であり、それだけで参加者に非日常性、ワクワク感を感じさせ、ワークショップ会場として適切であったと考えられる。

また、上述したように、今回は事前に積極的に企業人の参加を呼びかけたこともあり、多数の社会人参加者が集まった。そのことで、一面的になりがちな学生の議論を、経験豊かな社会人がフォローしたり、発想を拡げたりするなどの効果が見られた。

一方で、プログラムを検討する中で新たに浮かび上がった「魅力的なアジアの街角」というコンセプトを積極的に生かすため、第1回、第2回ワークショップの成果を直接的に十分生かすことができなかつた点が課題として挙げられる。

上記課題・改善点を実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか

今年度は、ワークショップ企画者、ファシリテーターともに経験値が乏しいなか、試行錯誤を繰り返すかたちでの運営を余儀なくされた。連続ワークショップにおける一貫した全体コンセプトの設定、および各回成果の有機的な関連づけについては、今後の課題としたい。

参加者からの意見の集約

(1) ワorkshopを通じた気づきや発見について (主な意見の抜粋)

- ・非日常を味わいたい人と平穏な日常の連続を好む人と2つのタイプがいること。
- ・街に住んでいる、歩くことをイメージすることで、街のあり様がより鮮明になる。
- ・人を交わせるアイデアがいろいろありそうだと気づいた。
- ・現実から逃避できる場所にみんな行きたいのかと思います。
- ・今回のブレインストーミングで、自分がまた行きたい街は、日常が逸脱しているものだと気づきました。
- ・スリル、ドキドキする感じが楽しさにつながることもあるのだと思った。
- ・皆非日常への関心が高い、若者のレベルは決して低くない。
- ・時には日常とは違う環境を体験した方が、楽しそうと感じた。
- ・表面上では見えないカテゴリー(括り)を見つけることの難しさと、そこにイノベーションの鍵があるように感じた。
- ・見方を変えると全く違った考えになること。
- ・全くカタチの無かつたモノが、人との対話の中で、短い時間でカタチ(らしきもの)になっていくことの驚き、もっとビジネスプランに近いところでやってみたい。
- ・不可能な事を思いつくのが面白く感じた。

(2) ワorkshopの運営面についての改善点 (主な意見の抜粋)

- ・グループ内に、考えには口を出さないが、アイデアの収束に導くファシリテーターがいたほうがよい。
- ・最後のアウトプットがやや現実離れ感があるので、プロトタイプを通じて具視化していくことに期待したい。
- ・進行について、何をすべきなのかわからない時があった。
- ・土日休日で開催したほうがよいと思う。
- ・会場がもう少し広かったらありがたい。

ウ. ワークショップのアウトプット等

産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

本ワークショップを通じて、「みんなが集まる街角の魅力」および「街角を魅力的にする仕掛け」について、それぞれ以下のようなアイデア・コンセプトが得られた。

(1) みんなが集まる街角の魅力

魅力の構成要素	アイデア・コンセプト (キーワード抜粋)
非日常性 (わくわく感)	好奇心、未知の体験、スリル (日常からの逸脱)、遺伝子の記憶 (本能)、危険、超経験、行き当たりばったり、いたずら、現実逃避、おいしい食べ物、おしゃれ、クエスト、冒険心
癒やし (やすらぎ・安心感)	やすらぎ、ゆるやかなつながり、癒やし、実家にいるような居心地、安全・安心、リラックス、たそがれ、さびしがりや、気候制御

(2) 街角を魅力的にする仕掛け

- ・街自体がいろいろなところへ移動できる空中都市
- ・マイナスイオン豊富な森や動物のいる癒やし空間と、カーレース場やUFOが飛び交う非日常空間を併せ持った都市
- ・伊勢神宮の式年遷宮のように、定期的に建物が移動する街
- ・祭りの際に住民が自ら家を移動し、新しい街並みをつくれる街
- ・うその観光マップや迷路、行き先不明のバスなどで構成される「でたらめの街」
- ・巨大ドームに覆われ、気候を人工的にコントロールできる街
- ・おせっかいおばさんが素敵な出会いを仲介してくれる「大切な人と出会える街」

発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか

本ワークショップの成果を基に、ライトプロトタイプ制作を行った。本ワークショップで各グループが描いたイメージ画を1枚のポスターに描き出すことによって、2030年のアジアの街角について具体的イメージをもって総括した。次頁に制作したプロトタイプを示す。

○総括ポスター



上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

文章のみならず、ポスターによるアイデア・コンセプトの表現を加えることによって、第3回学内ワークショップ（平成26年3月4日）ワークショップにおけるスムーズな議論の引継ぎと新たな視座の創出を試みた。

その他

本ワークショップは、Facebook によるリアルタイム発信を実施した。当日参加できないが関心ある人達とのオンタイムな情報共有を実現した。

URL <https://www.facebook.com/pages/NUWS3/562098017212278>


いいね！数 17



⑤ 第2回広域ワークショップ

ア. ワークショップ概要

名称	第2回広域ワークショップ（通算第5回）										
実施日時	平成26年2月8日（土）10:30～18:10										
目的・テーマ	「2030年における、高齢者が生き活きと暮らせる社会」の実現に向けたシナリオづくり										
仮説・狙い	名古屋大学では、平成25年1月12日のフューチャーセッション（自主開催）を皮切りに「2030年のあるべき高齢化社会を描く」というテーマをベースとした議論を重ねてきている。平成25年10月31日に実施された第1回学内ワークショップ、第1回国際ワークショップ、第1回広域ワークショップの議論を踏まえて、2030年の高齢化社会の最善および最悪シナリオの作成を本ワークショップで試みる。										
使用した対話の手法について											
要因解析を含むイノベーション対話ツールを中心にした対話型ワークショップ											
参加者の状況											
	所属機関・部署等		20～39歳		40～59歳		60歳～		合計		
			男	女	男	女	男	女	男	女	計
a	大学等	自然科学系研究者	2	1	1	1	1		4	2	6
c		技術系職員		1					0	1	1
d		事務系職員						2	0	2	2
e		リサーチ・アドミニストレーター（URA）	2	3	2		2		6	3	9
g		学生・院生	1						1	0	1
j	企業	研究開発部門	1		2				3	0	3
o	TLO						1		1	0	1
p	地方公共団体（公設試験研究機関を除く）					1			0	1	1
r	財団法人・第3セクター等			1					0	1	1
s	そのほか（いずれにも該当しないような場合）					1			0	1	1
合計			6	6	5	3	4	2	15	11	26
会場											
名古屋大学 ES 館 3 階大会議室											
<p>右の写真は趣旨説明する浦島邦子上席研究員 上述した通りの、今まで名古屋大学で開催してきた ワークショップの成果を元に制作したプロトタイプ デザイン画を参加者で共有すべく、壁に掲示した。</p>											
											

スケジュール	
10：30～10：35	開催挨拶：齋藤永宏教授
10：35～11：00	趣旨説明：浦島邦子上席研究員 同時に 22 ページからなる資料を参加者に配布した。
11：00～12：30	グループディスカッション ①キーワード案出、②時系列分析
12：30～13：30	昼食
13：30～14：50	グループディスカッション ③推進力分析、④効果・実現可能性分析
15：10～17：00	グループディスカッション ⑤シナリオ作成
17：00～18：00	キーワードおよびシナリオ発表会
18：00～18：10	講評：浦島上席研究員
ファシリテーターについて	
ファシリテーター：文部科学省科学技術・学術制作研究所 浦島邦子上席研究員 名古屋大学 辻信一特任教授	
テーブルファシリテーター：吉田千穂 URA、玉井克幸 URA、上谷優佳 URA、富田竜太郎 URA	
ファシリテーションの実施状況	
16 人のアクティブな参加者が年代ごとの 4 グループに分かれ、各テーブルには URA がテーブルファシリテーターとして参加し、上記のスケジュールに従って進めた。	
	
グループ討議の様子場面	

イ. ワークショップの検証

設計にあたっての仮説・狙いと実際に行ったワークショップとの比較・検証	
目的	2030 年の最善シナリオと最悪シナリオを作成 各グループから最善・最悪それぞれ 1 枚程度のシナリオが提出された。
方法論	キーワード案出、主要因子の時系列分布、推進力の検討、実現可能性 vs 効果の図を描くなどのプロセスを経てシナリオを作成
手段	対話をスムーズに行うために、参加者を年代別にグループ化
ワークショップを通じて新たな視点、考え方、着眼点（インサイト）が得られたか。	
高齢者の問題は、財政・経済問題として捉えられることが多いが、高齢者の誇りと尊厳が重要という共通した認識が得られた。	
ワークショップ等の運営から得られる効果・課題・改善点はどのようなものがあったか	
参加者が一定の年齢以上であったので、自分のこととして真摯に議論ができた。 シナリオを PC に記録したグループが多いので、会場に電子機器を準備すればよかった。	

上記課題・改善点を実際にどのように次のワークショップ等にフィードバックしたか
今日の議論を専門家によるシナリオ作成を行う第7回ワークショップ（3月4日開催）
に引き継いだ。電子機器については次年度に準備する。

参加者からの意見の集約

高齢者には生きがいと誇りが重要だと認識できた。高齢者の雇用、行動できる環境、教育の場が欲しい。健康維持、認知症になりにくい環境づくりなどの課題を知る機会となった。

ウ. ワークショップのアウトプット等

産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか

○「最善シナリオ」と「最悪シナリオ」の創作によるコンセプトの創出

各グループで2030年の最善シナリオと最悪シナリオを描いた。

(1) 30代グループ

①最善シナリオ 「脱孤立、ウキウキ“高動化”シティ」

高齢者の活躍の場の創出。これにより税収入の増加。熱田を「第二の巣鴨」として再開発し多数の客を集める。高齢者の集客のためにバス路線の整備をする。温泉施設プラス病院のような楽しく健康に暮らす施設を整備する。



「実現可能性 vs 効果」図での説明

②最悪シナリオ 「名古屋市の衰退」

高齢者の活躍の場の創出ができない。熱田の再開発も失敗。開発費の負債を抱え名古屋市の財政悪化。インフラの劣化。福祉の切り捨て。高齢者は、子世代が男女とも外で働くので、孫の世話を忙殺され地域コミュニティから孤立→負のスパイラル。

③質疑

・「第二の巣鴨」として再開発されても熱田に若者が入るのは難しいと思うが、若い人に恩恵はあるのか？

→住みやすいコミュニティは若者にとっても魅力あるはず。

(2) 40代チーム

①最善シナリオ 「張りのある生活を目指して 高齢者ゼロ宣言—名古屋モデルの構築」

2010年から2030年までに、高齢者は人口の25%から35%となり、高齢者が標準となる社会が到来する。高齢者を対象としたスポーツ大会や技能五輪の開催で、優れた個人を顕彰することにより目標を持って生活できる。社会において若い人に対する指導者として活躍することができる。

②最悪シナリオ 「生きがいの喪失」

自治体の無策のために、高齢者の健康促進や親睦活動が低迷している。このため認知症が増加する。子世代が介護にあたるので労働人口の減少と税収の減少が一層進み、高齢者のための施策ができない。

③質疑

・高齢者の働き方は？

→高齢者のそれぞれに応じた働き方のスタイルがある。ポイントは、ボランティアではなくあくまでも給与をもらって働くことにある。

・医療・介護の担い手は？

→ホームドクター制度が必要だと思う。介護従事者が不足するので、介護ロボットも必要。

・高齢者のスポーツ大会ができるか？健康促進のためにできることは何か？

→高齢者の最低限の生活に必要な筋力維持のための装置を開発しジムに設置する。

・複数世代間の同居がよいか？

→同居が良い。高齢者が暮らしやすいことは、若い人にも良い影響がある。自宅で最期を迎えることができる環境が重要

(3)50代チーム

①最善シナリオ 「シルバーバレー NAGOYA」

2030年名古屋の税収は東京を抜いて日本一となった。これは高齢者の起業による新規産業の相次ぐ成功による。きっかけは、「高齢者特区」構想に呼応してSIDCの提唱で名古屋大学にできた新たな教育システムであった。高齢になってもいつでも教育が受けられる。やろうと思えば1年でも学位が取れる。「高齢者特区」では高齢者が新たに医師になり開業することも可能となった。世界で最も活発なシルバーの活動地は「シルバーバレー NAGOYA」と呼ばれている。そうなることで、高齢者の起業や高齢者向けの医療サービスが増加している。また世界中から“匠”を招聘した。その結果、学習意欲・勤労意欲の高い労働者や技術者が名古屋に集まる。



PC を使用してシナリオ説明

財政の好転で都市インフラが充実し多数の若者が流入する。若年層を対象にした高齢者のスキルを活用する育児・家事サービス・情操教育などの起業が増える。小学校では1クラス5人担任制が実現する。

また「高齢者特区」では、「死に方の選択」として、死ぬまで好きなものを飲んで食べられるQOD「Quality of Death」を尊重するワガママな社会を実現している。高齢者を含む各人の個性や尊厳を大切にする、多様性を受容できる社会を名古屋市民は享受している。

②最悪シナリオ 「NAGOYAの衰退」

ベンチャーや新産業の創出に失敗し名古屋の税収は低迷を続けているので、インフラ整備や公共サービスの低下で要介護者が増加する。定年制は廃止されたが、高齢者を雇用する企業は増えない。高齢者の教育システムができたが、得た知識や資格を活かす場がない。高齢者の起業に対し金融機関は慎重である。税収の低迷による負のスパイラルで若者はこの街を去り、忘れられた街になっている。

③質疑

・雇用面で、高齢者と若者との関係はどうなるのか？

→若者の雇用を圧迫することなく、高齢者の技を伝授するのがビジネスモデルである。高齢者も働くことにより雇用が増大し、税収も増えるので市の財政を支えることができると思う。そのことは、生活の質の向上にもつながると思う。

・高齢者が全員働きたいわけではないと思う。

→リタイアしたい人はそれを選択できる。多様性受容型社会の構築ができています。「社会とのつながりが必要だ」と多くの人に思ってもらうことが大切である。

(4)60代チーム

①最善シナリオ 「キョウヨウ、キョウイク」

高齢になっても人に迷惑をかけない。つまり、認知症になりにくい環境となっている。そのためには、「キョウヨウ」と「キョウイク」がキーになる。この活動をサポートするコミュニティーセンターを設立。小さなコミュニティの祭りを企画し、高齢者も若い人も子供も入って神輿を担ぐ。世代間・近所とのつながりができている。

②最悪シナリオ 「人の世話になる老後」

そのまま何もしないことが最悪シナリオ。格差が広がり、治安が悪化する。本来は、生産活動を担う人まで家族の介護を担うことになり、そのため労働人口と税収が減る。

③質疑

・このシナリオの肝は何か？

→高齢者が「迷惑をかけない」と思う心情が、ドライビングフォースである。年をとって一番恐怖に感じることは、記憶力が劣化することである。探し物をする時間が多くなる。

・小さなコミュニティの大切さは？

→二世帯住居では気を使うことが多い。そこで、近所の人々のサポートが大切だと思う。

講評

・普段考えないことを考えることや、いろいろな人と話すのが大切。

・15年先と今は違うので、いろいろな視点で考えるべきである。これは15年前と今を比べると分かることだ。



ワークショップ終了後の集合写真

発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか

本ワークショップの成果を基に、ライトプロトタイプ制作を行った。具体的には、成果物であるシナリオのうち最善シナリオをイメージングしたプロトタイプ制作を委託した。次頁に、制作したプロトタイプを示す。

(1)30代グループ

・最善シナリオ 「脱孤立、ウキウキ“高動化”シティ」



(2) 40代チーム

・最善シナリオ 「張りのある生活を目指して 高齢者ゼロ宣言一名古屋モデルの構築」



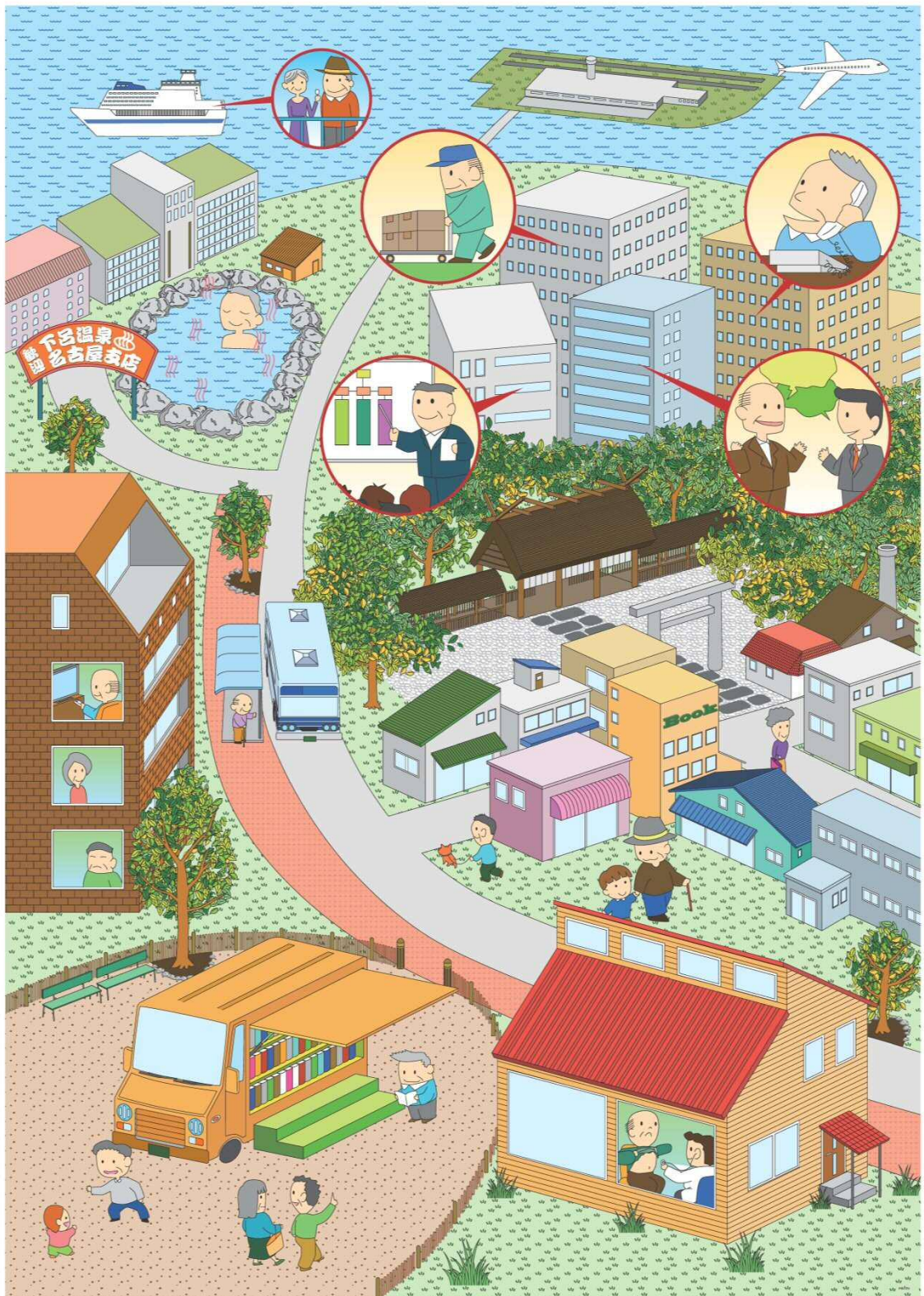
(3) 50代チーム

・最善シナリオ 「シルバーバレー NAGOYA」



(4)60代チーム

・最善シナリオ 「キョウヨウ、キョウイク」



上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか

文章のみならず、ポスターによるアイデア・コンセプトの表現を加えることによって、第3回学内ワークショップ（平成26年3月4日）ワークショップにおけるスムーズな議論の引継ぎと新たな視座の創出を試みた。